

研究ノート

下北半島風間浦村、大石神社の「蝦夷地・場所図」はどこを描いたものか

山田伸一

キーワード

絵馬 (Votive tablet)・樺太 (Karafuto, Sakhalin)・早坂文嶺 (Bunrei Hayasaka)・アイヌ民族 (Ainu)

はじめに

北海道開拓記念館（現北海道博物館）に美術史担当の学芸員として勤務し、二〇〇六年七月に五十歳を目前にして亡くなった林昇太郎さんに、蝦夷地の地引網漁の様子を描いた絵についての論文（以下、林論文）がある⁽¹⁾。

論の中心となったのは、下北半島の北部、風間浦村易国間にある大石神社の本殿に掲げられた「蝦夷地・場所図」などと呼ばれる絵馬だ（絵の写真は本紀要表紙、または林著書の口絵4を参照）。幕末に蝦夷地のどこかの漁業拠点を描いたと思われるこの絵馬について、林さんは「どこを描いたものか」を問い、探求を重ねたが、答えに行き着くことはできなかった。

ところが最近、私はたまたまこの絵馬とよく似た光景を描いた絵と出会ったことをきっかけに、この絵が樺太西海岸のエンルモコマフ（西富内、日本領期は真岡、現在はホルムスク）を描いたものだと考えるに至った。この経緯を記すとともに、林さんの考察の延長上に今後の課題を整理しておきたい。

林論文はこの絵馬一点について「どこを描いたものか」を問うにとどまらず、この絵を含めて蝦夷地の地引網漁の様子を描いた多くの絵のそれぞれが「何を

獲っているのか」を問い、さらにこれらの絵がどのような蝦夷地イメージを伝えたのかを問うていた。この問いの広がりがこの論文の魅力だと言っても良いだろう。本稿もそれらの問いを意識してはいるが、叙述の範囲は「どこを描いたものか」にほぼ絞ることにする。

なお、本稿では、先行研究者の名に「さん」を付けて記した部分がある。学術的な研究成果の報告として作法を逸脱しているかとも思うが、本稿の性格上、私には他に記し方がなかった。この点、おゆるしいただきたい。

一 絵を見比べる

（一）大石神社の絵馬

林論文によって大石神社の絵馬について簡単に紹介しておく。

画面の寸法は九二・七×一五三・五cmで、それに飾り金具が施された漆塗りの額縁がまわされ、全体の寸法は一〇五・六×一六六・二cm。「安政二乙卯年六月吉日」「文嶺画」の書込み、「願主 能登伊助」の貼紙などから、一八五五（安政二）年六月に地元出身の能登（高橋）伊助によって奉納されたこと、作者は山形出身の絵師、早坂文嶺であることがわかる。

画面は、手前に海面、中ほどに運上屋と思われる大きな建物を中心にくつもの建物がある平地、遠景に山を配する。そして、砂浜ではアイヌを含む人々が地引網漁をしている様を描く。

林論文は、画面に描かれた要素に、1〜22の番号を付し、その一つ一つを丁寧に観察して文章に記している。ここではその内容をまとめ、さらに論を進める都合上、新たに23〜25の番号を付して、図1と表1に示した。

林さんの探求は、見取図のように描かれた景観は、どこか特定の場所を描いたものかと考えることに発する。その通りだと思う。私には、まるで平面図を参

表1 「蝦夷地・場所図」に描かれた要素

1	神社	木造の鳥居。奥に石造の鳥居。柵を回した中に本殿。柵の周囲に樹木
2	畑	畝のようなもの。1カ所に門が設けられた柵が囲む
3	アイヌの集落	家屋9棟、高床倉庫5棟、クマ檻が1棟
4	アイヌの集落	家屋6棟、高床倉庫3棟、クマ檻1棟。物干し？
5	漁のための番屋？	物見櫓や物干しのようなもの（網干用？）が隣接
6	压榨機と釜場？	魚粕を製造するため
7	地引網を引き揚げている一群	網を引く33人と音頭取り1人
8	舟	2人のアイヌが乗る
9	舟	2人のアイヌが乗る
10	舟	和人とアイヌが1人ずつ乗る
11	漁を見守る和人2人	傍らにアイヌ1人と犬2匹
12	压榨機と釜場？	魚粕を製造するため
13	運上屋	すぐ隣に高札場
14	貯木場	魚粕製造の燃料などに用いる薪のため
15	柵	アイヌの集落を隔てる。2カ所に門
16	埋立地のようなもの	護岸が施され、建物2棟（うち1棟は蔵？）
17	樋	池の対岸の沢から水を引く
18	対岸に渡る橋	そこからのびる道は19まで続く
19	稲荷神社	赤い鳥居
20	漁の番屋？	側には物干しのようなもの（魚干し用？）
21	22を隔てる柵	境界は曖昧
22	アイヌの集落	家屋や高床の倉庫が建つ
23	蔵	3棟
24	蔵	7棟ほど
25	蔵	8棟ほど

出典) 1～22は林論文をもとにし、23～25を補った

考にしつつ描いたかのような、説明的な絵だと思われる。

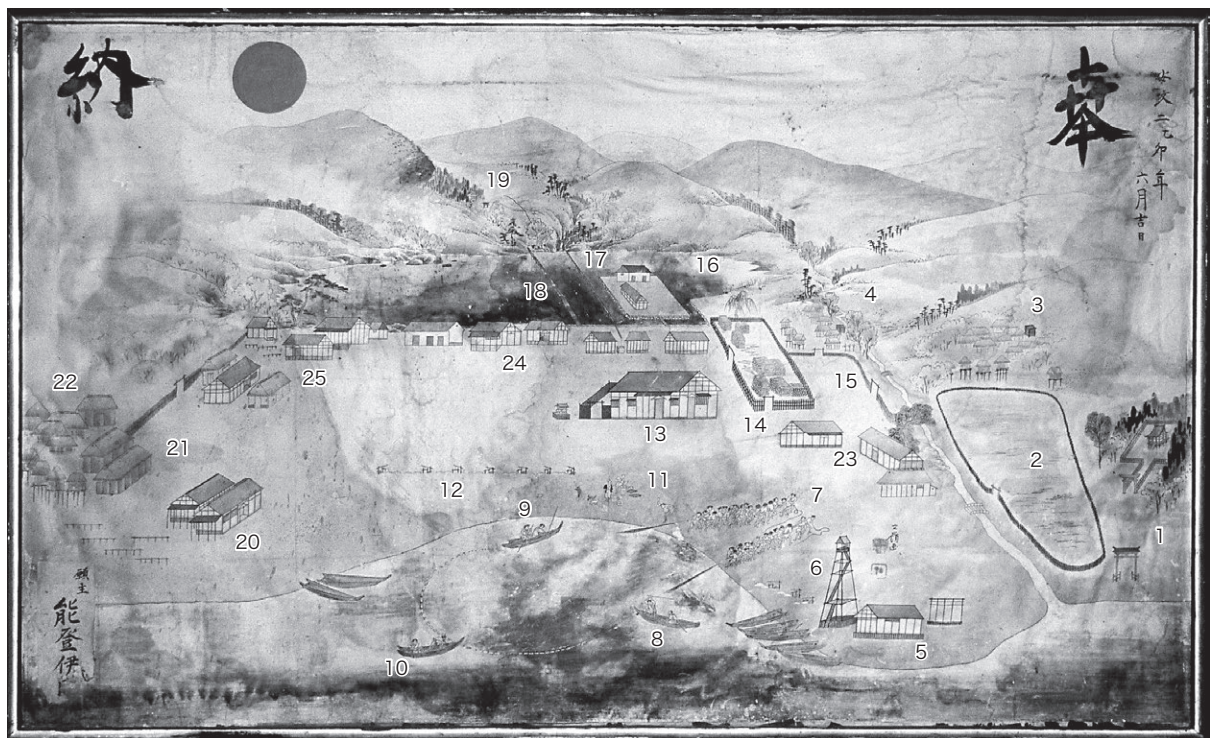


図1 「蝦夷地・場所図」絵馬の細部の検討

(二) 村垣淡路守範正の記録

さて、「この絵に描かれているのはどこか」という林さんの問いは、私をふくめて林さんの周辺にいた者の心に残り、蝦夷地の情景を描いた絵に接するとき、記憶のなかのこの絵馬の画面を思い浮べて見比べることがよくあった。

今回私が端緒を見つけたときも、そうだった。

二〇一六年十一月に、漂着物を主題とした当館の展示会に合せて「文書のなかの「漂着」をめぐる」と題して話す機会があり、その素材はないものかと何冊かの本を何気なくめくっていた。そのうちの一冊が、『大日本古文書 幕末外国関係文書 附録之七』^②。私が眺めていたのは、「幕末外国関係文書」の附録二から七に収録されている「村垣淡路守公務日記」の、さらに附録に当る部分。附録一「道の枝折」は、箱館奉行に任じられた村垣が一八五四（安政元）年に蝦夷地を巡見した際に個人的に記したもので、和歌や現地を描いたと思われる写生画を多く含んでいる。

目に留まったのは、見開き二頁にまたがる「エンルモコマフ」の絵だ（図2）。樺太南部の西海岸。一見して、「似ている」と思う。まさか、と思いつつ、『林昇太郎美術史論集 アイヌ絵とその周辺』を本棚から取り出し、口絵写真の大石神社の絵馬と見比べてみる。

二点の絵は、全体の構図が似ていて比べやすい。

手前に海面があり、中ほどに平地があつてその向こうに山がある。山から流れて来た川が、平地の右側で海に注ぎ込む。平地の左右の山の重なり具合も何となくは似ている。

建築物にも共通性が大きい。以下、図1と表1で設定した番号を括弧内に示しつつ、両者を照合してみる。大石神社の絵馬を《絵馬》、図2の村垣の絵を《村垣》と略記することしよう。

平地の中央附近には運上屋が（13）、川の河口の左（右岸）には物見櫓をもなった建物がある（5）。その左には魚粕加工用と思われる構造物が並ぶ（6）。運上屋の右には木柵で囲って何かを保管し（14）、その右には蔵が数棟



図2 村垣淡路守『道の枝折』より「エンルモコマフ」『大日本古文書 幕末外国関係文書 附録之七』344-345頁より

ある(23)。川の右側(左岸)には鳥居を二つもつ神社があり(1)、その左には柵で囲った畑らしきものが見える(2)。運上屋の裏、やや左の山を中腹まで階段を上ったところにも神社がある(19)。運上屋の裏手(24)と、左側の奥(25)にも数棟の蔵がある。「夷家」と文字を書き込んだアイヌ家屋三棟が川の左側にある(4)。文字の書き込みはないが、運上屋の左、画面の端近くに描かれた四棟の家屋の描き方もこれとよく似ていて、アイヌ家屋を表現したもののように見える(22)。

かなりの共通性が確認できる。だが一方で、違いを指摘できる部分も少なくない。山の輪郭や重なり具合には、似ている部分もあるが、ぴったり同じとまではいかない。《絵馬》には川に二本の橋が架かっているが、《村垣》には一本だけ。《村垣》も全体に海が湾入しているような海岸線を描くが、《絵馬》が示す河口左側が特に海に張り出したような地形は表現していない。《村垣》では川の右の神社の左に小山が、川のすぐ左に畑らしきものが表現されるが、《絵馬》にはない。《絵馬》は川の右にもアイヌ家屋を多く描くが(3)、《村垣》にはない。左端のアイヌ家屋との間を仕切っている木柵(21)も《村垣》にはない。建物の数やその相互の位置関係などにも違いがある(例えば23)。

似ていると思うから似て見える、他人のそら似のようなものか、とも思うが、《村垣》がごく簡単な素描であることや、両者が描かれた年代に一年とはいえない差があることを考えると、この比較だけで結論を出すのは早過ぎるだろう。

林論文を改めて読んで、「画面の上方に位置する池のようなものは、この場所の特徴的な要素のひとつである」という記述に気づく(一九六頁)。私の記憶のなかの《絵馬》の画面からは、この池の存在は落ちていた。位置の同定をしようとするとき、この池は非常に重要な手がかりとなる。

もう一度《村垣》を見ると、運上屋裏手の神社へと続く階段の手前に、短い斜めの線が三本、ほぼ平行に描かれている。これを橋だと断定することはできないが、橋ではないとしたら、わざわざ引いたこの線は何なのか？

(三) 松浦武四郎の記録

大石神社の絵馬の奉納年に近い時期に、樺太西海岸を旅した記録はないか。すぐ思い浮ぶのは、松浦武四郎だ。彼は一八五六(安政三)年、幕吏向山源太夫に従って樺太を旅している。

手近にあつた秋葉實翻刻・編の『松浦武四郎選集』を取り出してめくると、その第三巻がこのときに松浦が現地で記した手控を掲載している³⁾。以下、これを《武四郎手控》と略記することにする。

松浦は、七月四日から二十八日にかけてエンルモコマフに滞在した。《武四郎手控》には、「エンルモコマフ図」として、同地の様子が平面図の形で記されている(図3)。運上屋を

中心とし、それに向かって右に川があつて手前の海へと流れ込むというおよその位置関係は、当然ながら《村垣》と共通する。簡略な図だが、《絵馬》にあつて《村垣》になかったもののいくつか描かれていることに目を見張った。以下、対応する《絵馬》中の要素を、例によって表1と図1の番号で示す。

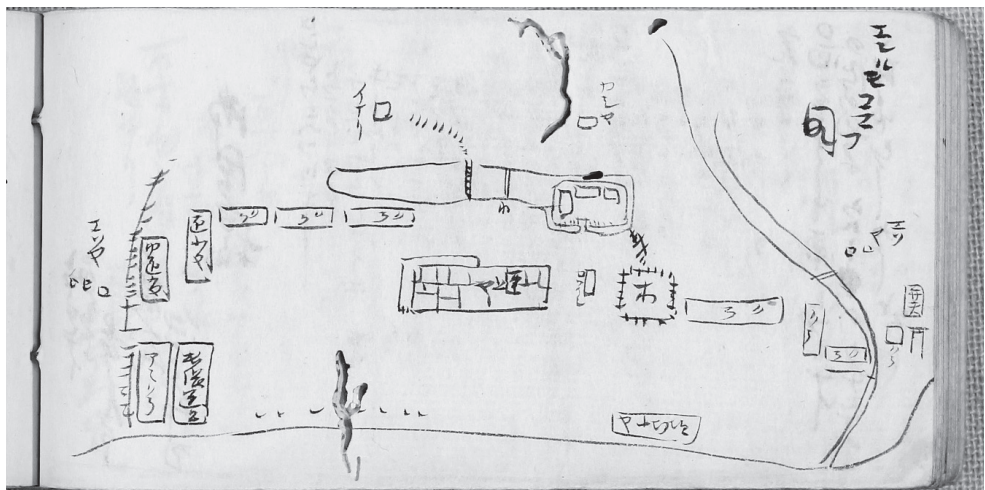


図3 松浦武四郎『手控 辰四』より「エンルモコマフ図」 松浦武四郎記念館所蔵

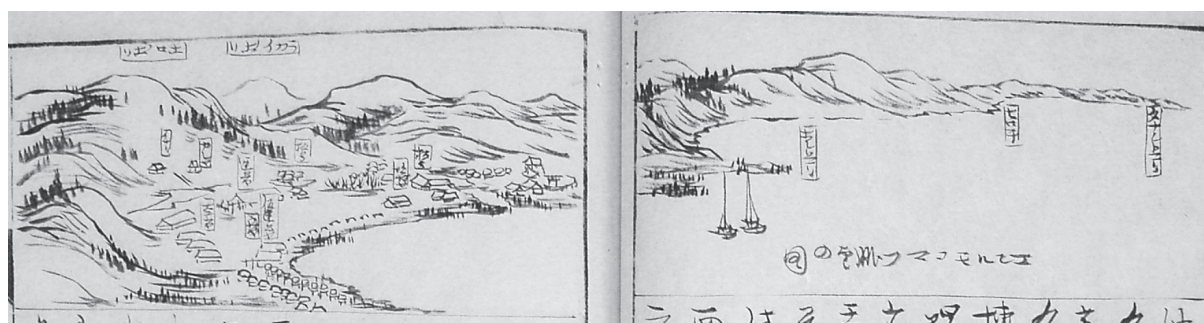


図4 『竹四郎廻浦日記 廿』より「エンルモコマフ眺望の図」 北海道大学附属図書館北方資料室所蔵

画面左端の一群の「エソヤ」（蝦夷家）の右に、運上屋の附属施設との間を仕切るように柵が見える（21）。柵には門が設けられてもいる。また、川には二本の橋が架かっているようだ。そして、運上屋の背後にある池のようなもの。そこには橋が渡され（18）、「イナリ」（19）に至る階段へと続く。池の内部の右寄りには、方形の島のようなものがあり（16）、そこに建物三棟が建っているようだ。川の右側（左岸）の「弁天」と記された神社（1）より上流にアイヌ家屋（「エソヤ」）がある（4）。細部にも《絵馬》と共通する点がある。運上屋の右にある囲いの中には「木」とあって、林論文が貯木場だろうと見たのと合致する（14）。池に渡す橋と見た梯子状の線の右には、これと並んで細い平行線が引いてあり、その下の文字は「水」と読める。林論文の「池の対岸の沢から水を引いている樋」と合致する（17）。先に見た「イナリ」は稲荷神社を指すのだろう。林論文は19の神社を「鳥居が赤いので稲荷神社だろう」と記していたのだった。

この手控に対応する松浦の日記に『廻浦日記』がある⁴⁾。この日記は文章に加えて同じ場所を北側から俯瞰するように描いた絵図を掲載して（図4）、周辺の

自然景観も含め、より広い視点から全体を把握することができる。山川に強い関心を持つ松浦のことだけあって、山の形や重なり具合などは、よく特徴を捉えて描いているように感じられる。《村垣》や《武四郎手控》では平地の左端に少し描かれているだけだったアイヌ家屋は、往還に面して家と倉が向き合うように並び、北に連なっているように見える。

全体の地形の特徴として注意しておきたいのは、海岸線が湾曲していることだ。河口部左（右岸）の海への張り出しは、多少は認められるが《絵馬》ほどではない。

『廻浦日記』の文章からは、エンルモコマフの状況について、彼の簡略な絵図では表現されていなかった情報を得ることができる。全体には、陸地は海に對して「戌亥」（北西）向きであり、「南はホンエンルン（弁天の西）、北はヲニチウホの岬に對して其間小湾をなし」とする。

以下に引く部分は、《絵馬》との比較検討に特に役立ちそうだ。

番屋一棟（梁八間半、桁廿間半）、板蔵十八棟、茅蔵四棟、稲荷の社（梁二間、桁三間）後ろの山の手に有。此処下に小沼有て、其に橋を架たり。弁天社一棟（梁二間、桁五間）川（中五間有）の西に有。石の鶏栖、燈籠、瑞籬等美々敷、内には額絵馬様のものを懸る。莊嚴其辺を照し、左右に金毘羅、八大竜王を祭る

ここからも、山の手にある稲荷神社の手前に「小沼」があつて橋を架けてあることがわかる。

注目したいのは、蔵の数だ。《絵馬》には、運上屋（この引用文では「番屋」）に付随する建物を合計二二棟ほど描いている。松浦が、絵図中では「塩切小屋」「出張運上」「切通小屋」などと呼んだ建物との関係がはつきりしないが、全体のおよその数は、ほぼ合致する。また、《絵馬》では、蔵かと思われる建物のなかに草葺きを描写したと思われるものが三〜五棟ある⁵⁾。この数も

「茅蔵四棟」という『廻浦日記』の記述に近いと言えるだろう。

また、川の右側の神社（弁天）について石の鳥居、燈籠、瑞籬（垣根）などを備えるとする描写は、『絵馬』に描かれた神社（1）の姿とびつたり重なる。

松浦の二点の絵図には畑が描かれていないが、『廻浦日記』には「川の南岸畑作よく出来、大根・蕪、関東筋の者よりよし。然し最早大根は此頃より臺立中には筋入りし也」とあって、『絵馬』が川の右に描く大規模な畑の様子と合致する。

松浦の絵図・文章による記録と『絵馬』の間には、相違点もある。『絵馬』にあつて松浦が記録していないものとしては、運上屋の左の高札場のような構造物を指摘できる。また、松浦の絵図には河口左の建物（5）が「塩切小ヤ」として描かれはするものの、『絵馬』（および『村垣』）にあつた物見櫓が見えない。逆に、『絵馬』に見当らなくて、『武四郎手控』に描かれているものには、「弁天」の左隣の「クラ」（蔵）、運上屋右の「セツイン」（雪隠）、池の裏の「カシヤ」（鍛冶屋）がある⁽⁶⁾。

しかし、これらの相違点は、全体の共通点が圧倒的に多いことを前にすれば、施設の増築や改廃の反映、もしくは記録の漏れや誤りによると考えていいものと思われる。

以上の検討から私は、大石神社の絵馬「蝦夷地・場所図」は、樺太のエンルモコマフを描いたものだと思われる。

二 林論文の延長上に

（一）樺太でいいのか

私は、言わば出会い頭にぶつかった絵を出発点として、ここまで来てしまった。しかし、大石神社にある絵馬に描かれた場所が樺太で本当にいいのかだろうか。絵馬自体に付随する情報を出発点とした考察と矛盾しないのか、確認が必要だ。

そのために、林論文の筋道をたどってみる。

出発点となるのは、大石神社に掲げられた、同じく早坂文鎮作の「福山城春望図」と題された安政四年奉納の絵馬に、「願主 能登伊助」と並んで「惣番人 啓白」と記されている点だ。そこから「能登伊助はどこかの（おそらく蝦夷地の）場所惣番人を務めていたことがわかる」とする（一九〇頁）。

次に、伊助の子孫が所蔵する開拓使と根室県が発給した辞令類、委任状がある。これからは、伊助が一八八〇年八月から八四年十月まで択捉島の紗那郡各戸長を務めていたこと、一八八五年十月には事故により故郷に戻るため、栖原角兵衛の部理代人としての業務を別の人物に委任したことがわかる。また、択捉島水産会編『択捉島漁業誌』（一九二七年）が紹介する、開拓使の「テス網」禁止令に関して一八七六年九月三十日付で高橋伊助が提出した願書には、伊助の肩書きが「漁場持栖原小右衛門手代」とある。

さらに、玉蟲左太夫『入北記』⁽⁷⁾によって、安政年間の栖原家の請負場所が西蝦夷地では留萌・苫前・天塩・樺太、東蝦夷地では山越内・エトロフだったことを確認し、これらの場所に候補を絞り込む。

再度整理してみると、林論文が挙げる素材から直接言えるのは、第一に、伊助が一八五七（安政四）年に蝦夷地のいずれかの地の「惣番人」だったらしいこと^(補註)。第二に、一八七六年九月から一八八五年十月の間、伊助は択捉島の紗那郡に深い関わりをもち、少なくともそのうちある時期からは定住していたこと、第三に、択捉に滞在した時期の伊助は栖原家の被雇用者ないしはそれに類する立場にあつたこと、の三つだ。絵馬が奉納された安政期に伊助が栖原家と関わりをもっていたことを直接示す史料は見当たらないが、林論文はこの三つを手がかりに、推測をさらに過去へと伸ばす。

つまり、絵馬が奉納された安政期にすでに伊助は栖原家の下で働いていたのではないかと推測し、伊助が働いた地（『絵馬』に描かれた地）は栖原家の請負場所のいずれかではないか、と考えるのだ。そして、それらのなかでも、伊助が一八七六年に栖原家の手代として渡っていた択捉を最有力と考える。

表2 開拓使樺太支庁管内の漁業目的寄留和人（1873年）

出身地	寄留地						計
	楠溪	小実	栄浜	東白瀨	鶴城	西富間	
北海道	9	3	1	6	2	5	26
				5	1		6
	9	3	1		1	5	19
青森県				1			1
	29	4	6	20	1	26	86
	29	4	6	9	1	26	75
				6			6
				3			3
岩手県				2			2
				9	2	1	12
				3	2	1	6
秋田県				6			6
				4		1	5
				2		1	3
山形県				1			1
				1			1
				1			1
宮城県				1			1
				1			1
新潟県				1			1
				5	1		6
				1			1
石川県				3			3
				1			1
				2			2
群馬県				1			1
				1			1
				1			1
計	38	7	7	50	6	33	141

出典）『戸籍調 明治六年』開拓使樺太支庁庶務課（北海道立文書館所蔵、簿書872）

註）出身地欄は現在の道県名を単位に整理した

限られた素材から導き出した仮説として、これは妥当なものだと思う。林さんが有力視した択捉ではないものの、絵馬が樺太のエンルモコマフを描いたものだろうとする本稿一の結論は、この仮説の範囲に収まっており、矛盾はない。今の時点で想像できる伊助の経歴は、林論文が描いた見通しを一部修正しつづなぞったものになる。伊助は、一八五五年には、栖原家の下で番人ないしそれに近い立場で樺太のエンルモコマフの漁業経営に携わった。その時期に、出身地の大石神社に祈願あるいは報謝のため絵馬を奉納した。その後、一八七六年以前に、伊助は択捉に転じた。やはり栖原家の経済活動との関係があつての

ことだろうとは推測できるが、正確な時期や理由はわからない。この見通しを、関連史料のなかに伊助の名を見つけることで補強、修正していくことが、今後の課題となる。

北海道の東と北。択捉と樺太とは大違いとも思えるが、栖原家の経営との関わりという点では、二つの地域はつながっていた。また、下北半島から多くの漁業労働者が赴いていたという点でも共通していた。

択捉については、林論文も引くように、菊池勇夫氏が一八六〇（万延元）年の出稼ぎ者の名と出身地を紹介している⁸⁰。樺太については、時期がやや下るが明治に入って一八七三年に開拓使樺太支庁が作成した「戸籍調」があり、ここから漁業目的の寄留者について抜き出して整理してみた（表2）。青森県北郡つまり下北半島出身者が圧倒的に多い。漁業労働者の流れにおいても樺太と択捉が密につながっていることが明らかだ。伊助の移動もこのつながりのなかにあったのだろう。なお、この「戸籍調」には伊助の名前は見えない。これ以前に樺太から離れていたのだろうか。

（二）林さんの「空振り」が教えること

私をふくめ、生前の林さんから大石神社のこの絵馬の話を直接聞いた人の多くは、林さんは「この絵は択捉を描いたものではないか」「きつと択捉だ」と語っていたという印象をもっているようだ。

改めて林論文を読むと、少し印象が違う。択捉が有力だとならんで探求と考察を進めているのだが、択捉説を強く打ち出してはいない。二〇〇二年の北海道開拓記念館特別展「描かれた北海道」の図録に寄せた「地引網で何を捕ったのか」では、「勝手な憶測だが」といった断りを交えながら、択捉説を伸びやかに語っていたのだが⁸¹。

この変化のかけには、林さんが択捉説を証明しようと実際に作業を重ねたのだが、壁に当たってしまったことがあったのだろう。林論文は、前述した菊池勇夫氏が示した一八六〇年の択捉出稼ぎ者の一覧に伊助の名前がないことにも言

及している。また、論文には言及がないが、林さんが遺した研究資料のなかには、宮城県図書館所蔵の「エトロフ嶋全図并廿五ヶ場所之図」の写真ファイルがあつて、探索の足取りがうかがわれる。私もこのファイルをめくってみたが、「似ている」と指摘できる光景は見当らない。

林さんは択捉以外の栖原家の請負場所にも探索の目を向けていた。林論文は、玉蟲左太夫『入北記』によって一八五七（安政四）年の苫前場所の支配人の名前が伊助であること、『苫前町史』によって苫前神社に「願主 須田伊助 小谷吉右衛門 惣番人中」と記された一八六四（元治元）年奉納の絵馬があることを記してもいる（二一八頁）。同名だが別人と考えるのが自然だろう。

択捉でも苫前でもなさそうだが、林さんの探求は、実は答えにかなり近くまで迫っていた。だが行き着けなかった。なぜだろう。林さんの研究仲間であつた数人と話しているうちに、ここには今後へとつながる問題がいくつか潜むように思われて来た。

一つは、「どこを描いたか」を探そうとしたとき、林さんは何に当たったのかという点に関わる。林論文は、「〴〵を見たが手がかりはなかった」といった空振りの調査の記録をほとんど書いていない。そして、むすびに「景観の要素を説明的に描いた画面から、その場所を特定することは可能と思われた。しかし、その場所を特定するには至らなかった」と記す（二二五頁）。無念にもこう記して稿を手放すまでの間には、どんな作業があつたのだろう。

松浦武四郎の記録をめくつてもよさそうだが、絵画を扱うことが多かった林さんには、案外後回しの作業だったのかもしれない。最優先は、有力な候補とにらんだ地に重点を置きつつ、蝦夷地の沿岸部各地を描いた絵を一通り見直すことだったのではないだろうか。

数ある絵画のなかでもこの探索にとって最も頼りになりそうなのは、幕府の命を受けて地図作成のために一八五六・五七（安政三・四）年に蝦夷地を巡った谷文晁門下で国学者前田夏蔭の門人でもあつた目賀田帯刀が、一八五八（安政五）年頃に作成した『延叙歴検真図』だ¹⁰。この絵は、東西蝦夷地と樺太の

沿岸部の光景を、海側から陸側を俯瞰するように描いている。作成の時期といい、構図といい、絶好のものだ。この原本は失われているが複数の写本が残されている。林さんの研究資料中に複写などが、確認できなかったが、機会を作つてじっくり見たのではないだろうか¹¹。

函館市中央図書館所蔵の写本で問題のエンルモコマフに当る「西富内（エンルコマフ）」の部分を見ると（図5）、第一章で見た村垣や松浦の絵図と重要な違いがある。川の右側（左岸）にあつた神社が左側（右岸）にあり、そしてこの地の景観で最も特徴的な運上屋裏の池が描かれていないのだ。これでは「似ている」とは思えたとしても、絵を丁寧に見比べる人であるほど、「違う」という判断に傾くのは、無理からぬと思われる。

村垣や松浦の訪問後、目賀田の訪問までの間に、神社の移設や池の埋立て、川の流路変更がなされたのだろうか。結論を出すにはその点の確認が必要だが、実景の忠実な再現という点に関しては『延叙歴検真図』には限界があるのではないかという問題が浮上する¹²。

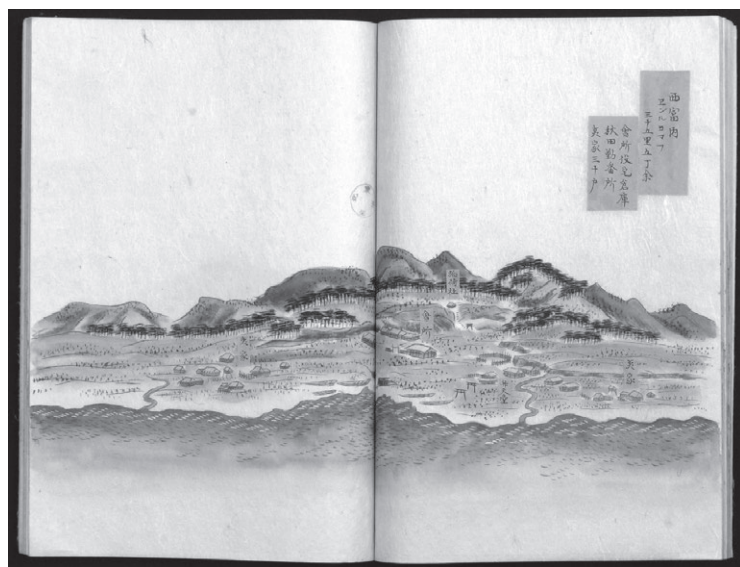


図5 『延叙歴検真図』より「西富内（エンルコマフ）」 函館市中央図書館所蔵

もう一つは、林さんが強い関心を注いだ「髭なしアイヌ」の問題だ。絵馬を細かく観察した林さんは、地引網を引くアイヌらしき男性たちの全員について、髭が描かれていないことに注目した。それがなぜかを考えた林さんを引きつけたのは、菊池勇夫氏が紹介する、ロシアの南下が深刻な問題となった一八〇七年に、エトロフ島のシヤナ会所でアイヌの改俗が実施され、月代や髭を剃ったアイヌ男性たちが会所で働かされたという事実だ。「これはアイヌの改俗の状況を示す事例のひとつだが、アイヌの改俗が進んだ場所では、髭のないアイヌの成人男性がいても不思議ではない。本図に描かれているのがそのような場所です、文鎮がそれを忠実に描いたとは考えられないだろうか」（一九九頁）という林論文の問題提起が、「髭の有無や衽の合わせ方を（アイヌと和人で）描き分けているのに、アイヌ描写の記号とも言うべき髭を敢えて省略するのだろうか」という絵の細部の観察に支えられていることに注意しておきたい。

日露雑居状態の樺太において、幕府はアイヌ民族の改俗を図ることを政策課題としていた。ざっと史料を眺めたところでは、一八五七（安政四）年五月の時点で南部のクシユンコタン周辺において「役土人」はすべて「帰化」したが「平土人」は十人未満とごくわずかだったとの記述が見える¹³。これを念頭に置くと、絵馬が奉納されたその二年前のエンルモコマフで大多数が「髭なし」だったとは考えにくいものの、政策理念とその現実への浸透状況を慎重に見据えつつ「髭なし」の意味に答えを出すことは今後の課題だろう。

林論文は、絵馬に描かれたのは択捉だろうという推測の根拠に、この「髭なしアイヌ」を位置づけるような論の構成はしていないが、択捉だとしたらこれを説明できるという見通しが、林さんが択捉説を深追いし、他の地域への探索に十分には手が回らなかったこととどこかで関係していたように感じられる。択捉については空振りだったのだが、後続打者に何かを残す空振りだったのではあるまいか。

おわりに

本稿では、いくつかの絵図の照合によって、大石神社にある「蝦夷地・場所図」と呼ばれる絵馬は、樺太のエンルモコマフ（西富内、後の真岡、現在のホルムスク）の様子を描いたものだとの結論に達した。絵馬の奉納者について今のところ判明している事実も、この結論と矛盾しないことを確かめた。この結論が妥当なのかどうか、ご意見をいただきたいと思う。

なお、本文に記した作業とは別に、刊行されている松浦武四郎の記録に収載の絵、函館市中央図書館本の『延叙歴検真図』のすべてを見てみたが、他にこの絵馬との関係を推測させる地点を見つけることはできなかった。

林論文では、第一の問いである「どこを描いたのか」への答えを得られなかったことで、第二の「地引網で何を捕っているのか」への明確な答えが得られなかった。それでも林論文は、『北海道水産予察調査報告』などの文献から、地域ごとに地引網で獲った魚種を整理し、どこかが判明したときの答えを用意していた。それに従って第二の問いに答えることもできるが、今はそれを仮の答えとしておくにとどめ、しっかりと答えたのは、安政期の樺太南西岸、エンルモコマフの状況について記した史料の精査に待とうと思う。「どこか」が判明した途端に、絵に描かれた情景を読み解くための史料は大幅に増えるからだ。

関係する史料や先行研究を多少読むと、絵が描かれた時期のエンルモコマフは、かなり複雑な状況にあったようだ。樺太が日露雑居とされたなかで、周辺地域からこの地へのアイヌの集住が行なわれたのか、樺太のなかでもアイヌ人口が突出して多い地になっていた。集住にはこの地の漁業経営が密接に関係していたと思われる。そうしたこの地の状況への理解と突き合わせることで、多くの建物それぞれの役割、運上屋とその関連施設の周辺部に所在するアイヌ住居、そこでの地引網漁の意味合い、等々、絵馬の内容への理解が深まっていくだろう。

本稿を準備中に読み、何度も嘔み締めたのは、林さんが一九九九年八月に石

狩市で開催された北海道・東北史研究会のシンポジウムで「近世石狩の鮭漁のイメージ」と題した報告したなかで、実施中だった北海道開拓記念館の特別研究「絵画史料に見る近世中期から明治初期の北海道生活誌」を紹介して述べている言葉だった¹⁴。林さんは、生活誌復元に格好と思われる画像に出合っても、作者や年代が不明なために使えない場合が多くあるが、それを打開していくためには、描かれている内容を検討する作業こそが有効だと述べ、歴史学や民族学、漁業史など、絵画史以外の立場からの意見を呼びかける。本稿が林さんの丁寧な絵馬の分析の上に初めて成り立つことを思うと、深く納得する。

本稿は、林さんのこの呼びかけに対する、十五年以上を経ての応答なのかもしれない。あまりに遅すぎたとの思いは痛い、林さんが蒔いた問いの種は、十年以上の時を経て芽吹く力を持っていたのだと思う。これをどう育てていくのだろうか。

謝辞

本稿作成のための史料閲覧と図版の掲載について、大石神社、北海道大学附属図書館、北海道立図書館、北海道立文書館、函館市中央図書館、東京大学史料編纂所のお世話になった。二〇一六年十二月に大石神社で絵馬を実見した際には、能渡俊悦、両角重雄、阿部利行の各氏、風間浦村教育委員会のお世話になった。また、史料や関連する研究についての情報提供、林昇太郎さんの研究展開の確認などについて、東俊佑、五十嵐聡美、池田貴夫、佐々木利和、霜村紀子、谷本晃久、舟山直治、三浦泰之の各氏にご協力をいただいた。参考地図は、水島未記氏に作成を引き受けてもらった。記して感謝申し上げます。

本稿の一部に、JSPS科研費(基盤C) 16K03066の成果を使用した。

注

(1)「蝦夷地の地引網漁図について」故林昇太郎氏遺作論集刊行会編『林昇太郎美術史論

集 アイヌ絵とその周辺」同会、二〇一〇年、一八九―二二〇頁(同内容で、北海道出版

企画センターからも刊行)。初出は『絵画史料に見る近世中期から明治初期の北海道生活誌』(北海道開拓記念館研究報告第十八号、二〇〇三年)五―二四頁。

(2) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書 幕末外国関係文書 附録之七』(東京大学出版会、一九六七年)。本稿に關係する絵図は三四四・三四五頁に掲載。

(3) 秋葉實翻刻・編『松浦武四郎選集 三』(北海道出版企画センター、二〇〇一年)。本稿に關係する絵図は二九二頁に掲載。

(4) 關係部分は、高倉新一郎編『竹四郎廻浦日記 下』(北海道出版企画センター、一九七八年、三三―三三頁、二四六―二四八頁)。

(5) 23に二棟ある。21の木柵の右側に位置するように見える二棟は、アイヌ家屋としては大きい、アイヌ家屋群の一部のようにも見え、判断しかねる。

(6) この「カシヤ」について、『竹四郎廻浦日記』の翻刻者は鹿島神社と解釈したのか「カシマ」と読んでいるが、周辺の武四郎の筆跡の特徴やこの地の状況を記した他の史料(例えば、平井勝政『唐太沿岸山水真景図 安政五年』函館市中央図書館所蔵。この史料については、林昇太郎さんの研究資料中の複写で知った)からは「カシヤ」が適切だと判断する。

(7) 稲葉一郎解説、玉蟲左太夫『入北記』(北海道出版企画センター、一九九二年)。

(8) 菊池勇夫『北方史のなかの近世日本』(校倉書房、一九九一年)三四一頁。

(9) 林昇太郎『地引網で何を捕ったのか』(第54回特別展 描かれた北海道―一八・一九世紀の絵画が伝えた北のイメージ』北海道開拓記念館、二〇〇二年)二二―三頁。

(10) この絵については、秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』(北海道大学出版会、一九九九年)三四八―三五一頁および関根達人『場所図 古地図にみる一八五〇年代の樺太(サハリン)島における先住民族と国家―目賀田帯刀筆「北海道歴検図」の検討を中心として』(『北海道・東北史研究』第八号、二〇一二年)二四―五六頁を参照。

(11) 本稿では、函館市中央図書館がウェブ上でデジタル画像を公開しているものを使用した。

(12) 目賀田自身が一八七一年に開拓使の要請を受けて『延叙歴検真図』をもとに改めて清書した『北海道歴検図』(北海道大学附属図書館所蔵)の「西富内」を見ると、『延叙歴検真図』との相違点がかなりある。文字を記した紙の貼る位置を間違えたのか、「弁天」が山上に、「稲荷」が川の右岸の平地にある。運上屋裏の池は存在しないばかりか、山の傾斜が海岸の方に迫っていて、『延叙歴検真図』では辛うじて残っていた空隙がなくなっている。建物の位置関係や数にも違いが見える。二点の絵は、同じく俯瞰図ではあっても視点の位置が少し異なるが、山々の形状や重なり具合などの差異は、視

点の違いによると「言える範囲には収まっていけない。こうした差異がなぜ生じたのか、説明がほしいところだ。なお、前掲根拠論文は、先住民族の住居や和人・ロシア人関連施設について、函館本の『延叙歴検真図』に文字によって記載されているものと『北海道歴検図』に描かれたものを地点ごとに比較、整理し、考察を加えた非常に有用な仕事であり、各地点における二点の絵の相違点について述べるなかで、エンルモコマフ（西富内）を唯一の例外として両者の家数は近似値になっている、とする。

また、鶴岡明美『江戸期実景図の研究』中央公論美術出版、二〇一二年の第五章第三節は、目賀田『延叙歴検真図』『蝦夷歴検真図』の諸写本の比較をしており参考になる。ただし函館本には検討が及んでいない。

(13)『大日本古文書 幕末外国関係文書』第十六卷（東京帝国大学、一九二三年）二〇五―二〇六頁。この史料については、秋月俊幸『日露関係とサハリン島―幕末明治初年の領土問題』筑摩書房、一九九四年）二〇―二二頁を参照した。

(14)林昇太郎「近世石狩の鮭漁のイメー」『北海道・東北史研究会石狩シンポジウム「石狩場所とアイヌ」集録』北海道・東北史研究会、二〇〇一年）二三頁。以下、もとの文章を引用しておく。

この特別研究を進めていて、やっかいだと思ったことは、それぞれのテーマの対象となる格好の画像にであつても、その作品の作者や年代が不明であり、その辺で曖昧にならざるを得ない。もちろん絵画的な位置づけなどされてはいない。史料批判に耐えられないわけです。かといって、そこでやめてしまうわけにもいかない。非常におもしろそうな作品は数多く残されている。絵画的には、それらの作者や年代などを明らかにする、できるだけ絞り込んでいく、位置づけていく作業をしていかなければなりません。そこで、描かれている内容を検討する作業が有効となります。矛盾するようですが、そこから制作年代や制作の背景を探り、作者などを推定していくことができるかもしれません。そのためには、歴史学や民族学、漁業史などの立場からの多くのご意見をいただきたいと思います。

（補註）本稿脱稿後、谷本晃久氏から「惣番人」は役職名ではなく「番人一同」の意味だろうとの指摘を受けた。確かに私は諸史料中に「惣番人」の肩書きをもつ人物を見たことがいまだになく、傾聴すべき指摘だと考える。



参考地図

NOTES AND SUGGESTIONS

What Location does the Votive Picture “*Ezochi Bashozu*” at Oishi Shrine in Kazamaura Village, Shimokita Peninsula Depict?

Shin'ichi YAMADA

The votive picture entitled “*Ezochi Bashozu*” located at Oishi Shrine in Kazamaura Village, Aomori Prefecture was drawn by Bunrei Hayasaka and donated by Isuke Noto in 1855. It has been presumed that the picture depicts a location somewhere on Ezochi, but exactly where it depicts remained an unsolved problem. This article compares the sketches of Norimasa Muragaki and Takeshiro Matsuura, while referencing the research results of Shotaro Hayashi, which cast

doubt on this point, and arrived at the conclusion that this votive picture depicts present day Kholmsk, Sakhalin. It was confirmed that the donor of this votive picture does not contradict this finding in terms of currently established facts.

Based on the results of this article, the issue going forward will be to broaden understanding of the contents of this votive picture by newly referencing more historical materials.